



Title	シブリーのアラビア詩・ペルシア詩比較論
Author(s)	松村, 耕光
Citation	言語文化研究. 2021, 47, p. 89-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79326
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シブリーのアラビア詩・ペルシア詩比較論

松 村 耕 光

Comparison of Arabic and Persian Poetry by Shiblī Nu‘mānī

MATSUMURA Takamitsu

Shiblī Nu‘mānī, a famous Urdu biographer and leading Muslim scholar, compared Arabic and Persian poetry in his five-volume Urdu work *Shi‘r al-‘Ajam* (*The Poetry of Persia*). The peculiarities found in his comparison are as follows:

- (1) Shiblī preferred Arabic poetry to Persian poetry, accusing the latter of being unrealistic.
- (2) He did not denounce Persian poetry as a whole. He tried to offer its objective overview, referring both to its strong points and weak points.
- (3) He made an effort to excuse the weak points of Persian poetry.

キーワード：シブリー，ペルシア詩史，アラビア詩・ペルシア詩比較論

1. はじめに

本稿では、シブリー・ヌウマーニー (Shiblī Nu‘mānī, 1857–1914) の、従来、十分に検討されてこなかったアラビア詩・ペルシア詩比較論を取り上げ、近代派インド・ムスリムの代表的論客とされるシブリーが、西洋文学の影響を受けて文学改革の必要が叫ばれていた時代に、インド・ムスリム知識層の古典的教養の土台となっていたアラビア詩やペルシア詩をどのように見ていたのか、確認してみたいと思う。

シブリーは、『神学概論 (*‘Ilm al-Kalām*, 1903)』、『神学 (*Al-Kalām*, 1904)』といったイスラーム神学論¹⁾や『マアムーン伝 (*Al-Ma‘mūn*, 1887)』²⁾、『ヌウマーン伝 (*Sīrat al-Nu‘mān*, 第1部, 1889,

1) 『神学概論』はイスラーム神学の概説書であり、『神学』は現代ムスリムが直面している諸問題に神学的立場から答えようとしたものである。

2) アッバース朝第7代カリフ、マアムーン (在位 813–833) の伝記。元々、シブリーは、ムスリムとしての意識を持たせるような文献がウルドゥー語には欠けていると考え、イスラーム諸王朝の詳細で包括的な歴史を歴史の因果関係が明確に解るような形で記述しようと思っていたが、すべての王朝について書くことはできず、また、一つの王朝を選ぶのも難しかったのでイスラームの有名な政治指導者伝 (royal heroes of Islam) を書くことにしたと『マアムーン伝』序文で述べている。

第2部, 1890)』³⁾, 『ファールーク伝 (*Al-Fārūq*, 1898)』⁴⁾, 『ガザーリー伝 (*Al-Ghazālī*, 1902)』⁵⁾, 『ルーミー伝 (*Sawānīh Maulānā Rūm*, 1906)』⁶⁾, 『預言者伝 (*Sīrat al-Nabī*)』⁷⁾など, ムスリムの偉人やイスラームの預言者ムハンマドの伝記をウルドゥー語で著してインド・ムスリムに大きな影響を与えた作家であるが, ウルドゥー文学やペルシア文学にも大きな関心を持ち, ウルドゥー語やペルシア語で詩作するとともに⁸⁾, 『アニース・ダビール比較論 (*Muwāzanah-e Anīs-o-Dabīr*, 1907)』⁹⁾や『ペルシア詩史 (*Shi'r al-'Ajām*, c. 1908-1918)』(全5巻)というウルドゥー語著作も残している。

シブリーのアラビア詩・ペルシア詩比較論は、『ペルシア詩史』の他に、『シブリー著作集』第2巻 (Sayyid Sulaimān Nadvī, ed., *Maqālāt-e Shiblī*, vol. 2, 1931) に収められた二つの短い論文の中にまとまって見られる。一つは, 1908年4月3日と日付が入った論文「アラビア詩とペルシア詩の比較 (‘Arabī aur Fārsī Shā’irī kā Muwāzanah)」で¹⁰⁾, アラビア詩とペルシア詩の特徴が簡単に列挙された, 舌足らずな印象のある論文である。もう一つは1909年12月発表された「アラビアの詩 (Shi'r al-'Arab)」という論文であるが, これはイブン・ラシーク (Ibn Rashīq, d. 1070/71) の *Al-'Umdah fī Maḥāsīn al-Shi'r wa Ādābihi wa Naqdihi* というアラビア語著書の書評論文で¹¹⁾, どこまでがイブン・ラシークの見解で, どこまでがシブリーの見解なのか, 判然としない書き方になっている。本稿では, 最晩年の著作である『ペルシア詩史』を中心に検討することとする¹²⁾。

3) スンナ派四大法学派の一つハナフィー派の祖とされるイブン・ハニーファ (Ibn Ḥanīfah, d. 767) の伝記。

4) 第2代カリフ, ウマル (‘Umar, d. 644) の伝記。

5) イスラーム法学, 神学, 神秘思想に大きな影響を残したアブー・ハーミド・ガザーリー (Abū Ḥamid Ghazālī d. 1111) の伝記。

6) 神秘主義詩人ルーミー (d. 1273) の伝記。シブリーは、『ガザーリー伝』, 『ルーミー伝』でもガザーリー, ルーミーの神学思想的側面を重視している。彼はこの2著を神学関連の著作でもあったと考えていた (『ルーミー伝』序文を参照)。

7) 『預言者伝』はシブリーの死後, 出版された。シブリーは第2巻の途中までしか執筆しておらず, 弟子のスライマーン・ナドヴィー (Sayyid Sulaimān Nadvī, d. 1953) が遺志を継いで完成させた。第1巻は1918年に出版されたが, 第2巻以降の『預言者伝』に関する書誌情報は不明である。全7巻。

8) 「希望の朝 (Shubh-e ummīd)」という, アリーガル (‘Aligarh) 運動の指導者アフマド・ハーン (Ahmad Khān, d. 1898) を賛美したウルドゥー詩が特に有名である。ウルドゥー語で書かれた政治詩やペルシア語で書かれた恋愛詩なども高く評価されている。

9) イスラームの預言者ムハンマド (Muḥammad, d. 632) の孫フサイン (Husain) 一族が680年にカルバラー (Karbālā) でウマイヤ朝軍に殺害された出来事を描くマルスイヤ (marthiyah, 哀悼詩。詩型は自由) の詩人として絶大な人気を博したラクナウのアニース (Anīs, d. 1874) とダビール (Dabīr, d. 1875) の優劣を論じている。

10) 『シブリー著作集』第2巻 (アーザムガル, 1931年) 所収。

11) 『シブリー著作集』第2巻 (アーザムガル, 1931年) 所収。

12) 本稿では, アーザムガルのマアリーフ (Ma‘ārif) 出版社より以下の年に出版された『ペルシア詩史』より引用を行う。第1巻, 1984年。第3巻, 1956年。第4巻, 1951年。第5巻, 1957年。

『ペルシア詩史』の序文には, ペルシア詩に関しては「詩人のタズキラ (tazkirah, 列伝。詩人のタズキラは伝記的事実と詩句の紹介とで構成されている) は数多くあるが, それらは実際には詩人の優れた詩句を選びすぐって集めた詩選集のようなものでしかない。詩人に関する情報は少なく——極めて少なく——, 詩の時代ごとの変化やその原因に関する記述は一切ない」と述べている (『ペルシア詩史』——以下, Sh. A. と略記する——, vol. 1, p. 2. 尚, 本稿引用文中の括弧内の詩人の没年表記や語句説明は引用者によるものである)。このような状況に不満を持ち, 詳細で体系的なペルシア詩史の必要を感じていたものと思われる (ムスリム偉人伝同様, 『ペルシア詩史』もまた, 歴史書として構想され, 執筆されたわけであるが, 資料の取り扱い方には批判がある。Maḥmūd Shīrānī の *Tanqīd-e Shi'r al-'Ajām*, Delhi, 1942——*Maqālāt-e Hāfiẓ Maḥmūd Shīrānī*, vol. 5, Lahore, 1970に増補版が収録されている——や Zuhūr al-Dīn, “Shiblī: Shi'r al-'Ajām jild-e awwal kī raushanī mēn”, in Khaliq Anjum, ed., *Shiblī kī ‘Ilmī-o-Adabī Khidmāt*, New Delhi,

『ペルシア詩史』の発行年は、以下の通りである（発行年の明確でない巻もある）。

第1巻, 1908年頃。

第2巻, 1909年。

第3巻, 1910年。

第4巻, 1912年か1913年。

第5巻, 1918年¹³⁾。

第1巻から第3巻までがペルシア詩人論で、第1巻は初期詩人からニザーミー (Niẓāmī, d. 1209?) まで、第2巻はアッタール (‘Attār, d. 1221?) からイブネ・ヤミー (Ibn-e Yamīn, d. 1368) まで、第3巻はフィガーニー (Fighānī, d. 1519) からアブー・ターリブ・カリーム (Abū Ṭalīb Kalīm, d. 1650/51) までを扱っている。シブリーは、古典ペルシア詩の歴史は三つの時期に分かれると考えており——これは「初期詩人 (qudamā)」、「中期詩人 (mutawassiṭīn)」、「後期詩人 (muta’akhhirīn)」という伝統的な区分に対応する——¹⁴⁾、各時期に1巻が当てられている¹⁵⁾。第

1996を参照)。

『ペルシア詩史』出版以前に、E. G. ブラウン (Edward G. Browne, d. 1926) の『ペルシア文学史 (A Literary History of Persia, 4 vols, 1902-1924)』の第1巻 (1902年)、第2巻 (1906年) やムハンマド・フサイン・アーザード (Muḥammad Husain Āzād, d. 1910) の『ファールスの詩人たち (Sukhan-dān-e Fārs, 1907)』のようなペルシア文学に関する著書が英語やウルドゥー語で出版されていたが、前者に関しては、友人メフディー・ハサン (Mehdī Hasan) 宛の1907年4月11日付書簡で、「ブラウンの本を見てとても悲しくなりました。きわめて低俗なものです。これは誇張ではありません。(中略) フィルダウシー (Firdausī, d. 1025) に関しては、引用も含めてほんの2、3頁しか書いておらず——(ブラウンは) 優れた美意識の持ち主であると言うべきか——、フィルダウシー (の作品) は7篇の『ムアッラカ (mu’allaqah)』(イスラーム布教以前に作られた優れたアラビア詩) に匹敵するとも認めず、どの点から見てもこの本(『王書 (Shāh-nāmah)』のこと) はどのペルシア詩人の作品にも匹敵しないと云うのです」(Sulaimān Nadvī, ed., *Makātib-e Shiblī*, vol. 2, Aẓamgarh, 1971, pp. 211-212) と、ブラウンが『ペルシア文学史』第2巻のフィルダウシーに関する章で下した否定的な評価を批判している。

アーザードの著書『ファールスの詩人たち』に関しては、シブリーは上記友人宛の1907年5月3日付書簡でこう述べている。「ありがたいことに、アーザードは第11講演まで私の領域に足を踏み入れていません。12番目の講演で競技場に足を踏み入れますが、それまでに体力を消耗しており、さっと一巡りしただけで出て行ってしまっています。そのため、私には多くの場所が残されています。全体的に見ると、この本はブラウンの土地台帳よりもはるかによくできています」(Saiyid Sulaimān Nadvī, ed., *Makātib-e Shiblī*, vol. 2, p. 212. 『ファールスの詩人たち』は言語一般やペルシア語とサンスクリットの同源性を論じた第1部とペルシア語やペルシア文学に関する11の講演をまとめた第2部とで構成されており、ペルシア詩の歴史は第2部の第11講演で扱われている。シブリーは第1部全体を一つの講演と考えているのであろう。「ブラウンの土地台帳」とは、ブラウンの *A Literary History of Persia* を指す。)

13) 発行地は、いずれも晩年のシブリーの活動拠点であったアーザムガル。第5巻は、シブリーの死後、スライマーン・ナドヴィーが残された原稿を整理して出版した。

14) シブリーは、古典ペルシア詩は素朴な段階から洗練された段階に至り、やがて衰退の時代を迎えたと考えていた。

初期には単純明快で素朴な詩想があり、直喩・隠喩は時折現れるだけである。言葉も洗練されていない。表現したいことを複雑にすることなく、はっきりと表現する。一步前進すると、詩想に飛翔が見られるようになり、隠喩は彩り豊かに、直喩は繊細になる。誇張は力強くなり、言葉は洗練されたものになる。表現されるべき内容は隠喩で表現されるようになり、次いで難解趣味 (diqqat-āfrīnī) や繊細表現 (bārīk-bīnī) が生まれる。誇張は天にまで届き、きわめて繊細な表現が行われ、隠喩に隠喩が重ねられ、感覚ではなく、想像の産物が中心となる。これが発展の最終段階であり、衰退の始まりである (Sh. A., vol. 4, pp. 97-98)。

15) 『ペルシア詩史』第1巻序文には、「第1期はハンザラ (Hanẓalah, d. 841) からニザーミーまでの時代、第2期はカマル・イスマーイー (Kamāl Ismā‘īl, d. 1237) からジャーミー (Jāmī, d. 1492) までの時代、第3期はフィガーニーからアブー・ターリブ・カリームまでの時代」の三つの時期に分かれると記されているが (Sh. A., vol. 1, p. 3)、第2期に対応する『ペルシア詩史』第2巻はアッタールから始まっており、ジャーミーの項目はない。

シブリーは、「カリームの後、詩は詩ではなく、謎々になってしまった」(Sh. A., vol. 1, p. 3) と見做し、カリーム以降のペルシア詩の歴史について記述していない。第3巻のカリームの項の、「この時代、新奇な題材使用 (mazmūn-āfrīnī)、奇想性 (khayāl-bandī) の支配が(自然な) 言葉 (zabān) や慣用表現 (muḥāwarah-bandī) の使用から詩人たちを遠ざけてしまったが——ナースィル・アリー (Nāsir ‘Alī, d. 1697)、ガニー (Ghanī Kāshmirī, d. 1661)、ベーディル (Bedil, d. 1720) はそれらの支配下に入り、言葉の味わい (luṭf-e zabān) を失ってしまった——、カリームは高度の想像性にもかかわらず、それを手から離さなかった」(Sh. A., vol. 3, p. 204) という記述から、「言葉の味わい」を

4 巻は 3 章で構成されており、第 1 章では、詩の本質や表現などに関する一般的な議論、第 2 章では、ペルシア詩の形成・発展に関する議論、第 3 章では、ペルシア詩の特徴やフィルドウスイーが、物語、歴史、思想の叙述などに用いられる、脚韻形式 aabbcc の詩型マスナヴィー (mathnavī) で著した叙事詩『王書 (Shāh-nāmah)』に関する議論が行われている。第 5 巻には、カスィーダ (qaṣīdah, 頌詩や風刺詩などに用いられる、脚韻形式 aabaca の詩型) 論、恋愛抒情詩ガザル (ghazal, カスィーダと同じ詩型) 論、神秘主義詩論、道徳詩論、哲学詩論が収められている。シブリーのアラビア詩・ペルシア詩比較論がまとまって見られるのは、第 4 巻と第 5 巻である¹⁶⁾。

2. 『ペルシア詩史』に見られるアラビア詩・ペルシア詩比較論

2-1. 『ペルシア詩史』第 4 巻に見られるアラビア詩・ペルシア詩比較論

第 4 巻第 3 章の冒頭でシブリーは、アラビア詩とペルシア詩の特徴を以下のようにまとめている¹⁷⁾。

・アラビア詩の特徴¹⁸⁾

- 1) 勇気や豪胆さ、独立不羈・客人歓待・自己犠牲の精神などが扱われていること。
- 2) 文化、社会、日常生活に関して、歴史書では解らないような詳細な描写が行われていること。
- 3) イランでは美少年愛が中心であるが、アラビア詩は女性への愛を扱うので、自然な感情表現が可能であること。
- 4) 心を打つマルスィヤ (哀悼詩) が書かれたこと。

失ってしまった詩は詩ではないとシブリーが考えていたことが解る。

- 16) 元々シブリーは、『ペルシア詩史』は詩人論 3 巻とペルシア詩論 1 巻の全 4 巻で構成され、第 4 巻のペルシア詩論が全体の精髓を成すと考えていたが (Sh. A., vol. 1, pp. 3-4), ペルシア詩論が長くなってしまったため、その部分が二つの巻に分割された (Sh. A. vol. 5, p. 3)。
- 17) シブリーの言うアラビア詩は、ウマイヤ朝 (661-750) までのアラビア語の詩を指している。シブリーによれば、「真のアラビア詩 (の時代) はイスラームよりずっと前に始まり、ウマイヤ朝の時代までには終わっていた。その後、アラブ支配の中心地はバグダードとなり、そこでアジャム (‘Ajām ペルシア) と深く接触したために、アラブの文化は一変してしまった。彼らの詩もすっかり変わってしまった。詩想、表現法、隠喩、直喩、詩題の性格、カスィーダとガザルの源泉となるもの——それらすべてが変わってしまった。(中略) アジャムの詩が生まれたとき、アラブの詩は既にアジャム的となっており、言語の違いがあるだけであった。したがってイランの詩はアラブの (詩の) 真似をしたように見えるが、実際には、自分の真似をしたのである。アラビア詩の変化はアジャムの影響によるものだったからである」 (Sh. A., vol. 4, pp. 120-121)。
- 18) Sh. A., vol. 4, pp. 186-187.
論文「アラビア詩とペルシア詩の比較」では、シブリーは以下のような点にアラビア詩の特徴を見ている。
 - ・勇壮さ。
 - ・独立不羈の精神。
 - ・自画自賛。
 - ・写実的な自然描写。
 - ・率直な感情表現。
 - ・社会や日常生活の具体的な描写。
 - ・愛しい人が女性であること。

• ペルシア詩の特徴¹⁹⁾

- 1) 史詩が書かれていること。
- 2) 春、雨季などの自然の情景が描写されていること。
- 3) 繊細な恋愛描写が行われていること。
- 4) 哲学詩・神秘主義詩が書かれたこと。
- 5) 道徳詩が書かれたこと。
- 6) 宗教家の欺瞞が暴露されていること。
- 7) 詩句に凝縮性があること。
- 8) 言葉が洗練されていること。
- 9) 二つの単語を結合して素晴らしい連語を生み出したこと。
- 10) 興味深い詩想を生み出したこと。

以上のようにシブリーは、アラビア詩とペルシア詩それぞれの特徴を述べているのであるが²⁰⁾、注目すべきは、シブリーが前者の後者に対する優越を主張していることである。『ペルシア詩史』第4巻第1章の現実性 (wāqī'īyat) と誇張表現に関する部分でシブリーはこう記している。

詩の目的が単に気晴らしであるなら、誇張は役に立つであろう。しかし、力強い詩、人々を揺り動かし、国中に興奮を巻き起こすような詩、アラブ諸部族を熱狂させていた詩、追悼の際、家の扉や壁にさえ涙を流させた詩も、現実性を欠いていたなら、何も為しえないであろう。歴史書で読んだことがあるであろうが、^{ジャーヒリーヤ}無明時代には、1篇の詩句が一人のありふれた人物の名をアラビア全土に知らしめていたものであった。これとは反対に、イランの詩人たちは称賛の言葉を書き連ね、称賛されている人物の名前すら解らないようにし

19) Sh. A., vol. 4, pp. 187-200.

論文「アラビア詩とペルシア詩の比較」では、アラビア詩には見られないペルシア詩の優れた特徴として、以下の点々が指摘されている。

- 一連の出来事を叙述し、詩想を連続的に展開させるマスナヴィー詩型があること。
- 哲学的問題や哲学的思想を表現していること。
- 道徳について詳細な叙述があること。
- 神秘主義を大きく取り扱っていること。
- ガザルを発展させたこと。
- 多彩な詩想があること。
- 洗練された繊細な直喩・隠喩が豊富に見られること。

20) アラビア詩、ペルシア詩の詩風の違いはアラビア、ペルシアの文化的、社会的な地域的要因によるものとシブリーは考えていた。シブリーによれば、イランは昔から文化程度が高く、言葉が洗練されていたが (Sh. A., vol. 4, p. 189)、専制的な政治体制であったため、自由な精神に基づく詩は書かれなかった (Sh. A., vol. 4, p. 186)。アラビア詩の特徴は、自由な精神に基づいて作られていることである (Sh. A., vol. 2, p. 55)。論文「アラビア詩とペルシア詩の比較」では、アラビア人は山や平地に住み、王や権力者の支配下にはなかったため自由の気風に溢れており、好戦的であった、また、生来雄弁で、率直かつ情熱的に情景や思想を表現していた、と述べられている (Maqālāt-e Shibli, vol. 2, A'zamgarh, 1964 [5th impression], p. 49)。

てしまった。^{ジャーヒリーヤ}無明時代の詩人たちの詩には現実性があった。このため、詩には感銘を与える力があった。イランの詩人たちは言葉を並べ立てただけである。それによって少しの間、気晴らしにはなったが、それだけのことに過ぎなかったのである²¹⁾。

尤もこのようなアラビア詩も、シブリーによれば、誇張表現が好まれるようになると現実性を失い、感銘を与える力を失ってしまう――。

感銘を与える力は、詩に現実性があるときに生じ得るのである。空疎な言葉を連ねたところで何になるであろうか。アラビア詩にたった1詩句で部族中を熱狂させる力があったのは、詩に現実性があった間だけであった。詩で述べられていたことは、すべて真実であった。アッバース朝の時代になり、誇張表現が始まると、詩はうつろな響きを発するだけになってしまい、詩人たちは詩集を編み続けたが、伝えるべき内容は一つもないのであった²²⁾。

2-2. 『ペルシア詩史』第5巻に見られるアラビア詩・ペルシア詩比較論

シブリーのアラビア詩・ペルシア詩比較論は、カスィーダは偉大な人物の偉大な業績を人々に知らしめる働きのある、非常に役に立つ詩型である²³⁾、とカスィーダの重要性を論じた『ペルシア詩史』第5巻のカスィーダ論の中にも見られる。シブリーは、「アラブでは詩人たちがカスィーダで扱った人物たちの名は今でも残っているが、イランの詩人たちが大いに誇張して称賛した人物は、今やその名前すら知られていない」と断じ²⁴⁾、カスィーダには、

- 1) 称賛されるべき人物が実際に称賛に値する人物であること
- 2) 称賛の言葉が真実であること
- 3) 称賛されるべき資質が感情を揺さぶるように表現されること

の3点が必要であると指摘して²⁵⁾、こう述べている。

ペルシア語のカスィーダで以上の条件がすべて満たされたことは一度もない。そもそも、称賛に値しない人物が称賛され、たとえ称賛に値する人物であっても、美德の真の姿は描かれず、あらゆる努力は誇張表現に向けられたのである²⁶⁾。

21) Sh. A., vol. 4, pp. 75-76.

22) Sh. A., vol. 4, pp. 75-76.

23) Sh. A., vol. 5, p. 25.

24) Sh. A., vol. 5, pp. 25-26.

25) Sh. A., vol. 5, p. 26.

26) Sh. A., vol. 5, p. 26.

このようにペルシア語詩人たちを批判した後、シブリーはアラビア語詩人たちのカスィーダ詩作姿勢について次のように記している。

アラビアの詩に目を向けてみるがよい。アラブ人は元々、誰かを詩で称賛することは恥ずかしいことであると考えていた。称賛するときも、決して褒美を受け取ることをよしとせず、本当のことしか詩にしなかった。或る名士が或るアラブ詩人に自分を称賛する詩を作るよう頼んだところ、詩人はこう答えた、『まず何か事を為してください、そうすればお作りしましょう』と²⁷⁾。

『ペルシア詩史』第5巻のガザル論においては、ペルシア語ガザルとアラビア語ガザルとが、愛しい人、求愛者、描写法、現実性の4点で以下のように比較されている。

1) 愛しい人

ペルシア語ガザルの愛しい人は街の慎みのない美形であるのに対し、アラビア語ガザルの愛しい人は貞淑な一般女性である。

イランの愛しい人は大抵の場合、街の美形 (shāhid-e bāzārī) であり²⁸⁾、慎みがなく、誰のものにでもなり、何人とも関係を持つ。今日、この者と一緒であるかと思えば、明日は他の者と一緒である。宴席に現れると四方から求愛者が押し寄せる。目配せしたり、合図をしたり、微笑んでみたり、妖しげな眼差しを向けて愛していると思わせたり、怒っている振りをしてみたり、言うことを聞いてみたり、腹を立ててみたり、——求愛者はその表情一つ一つに心を奪われるのである。誰もが、真の愛情は自分に向けられていて他の者たちは騙されていると思い込んでいる²⁹⁾。

「これに対して」——とシブリーは書く——「アラビアの愛しい人は女性部屋にいる、貞淑な女性である。愛しい女性の許に行くのは難しく、そこに行こうとする者は剣の洗礼を受けること

27) Sh. A., vol. 5, pp. 26-27.

28) 『ペルシア詩史』のペルシア語訳の訳者は、「街の美形 (shāhid-e bāzārī)」とは、恐らく、ヒジュラ暦30年代、40年代にマー・ワラー・アン・ナフル (Mā warā' al-Nahr) 付近から連れてこられたトルコ系美少年奴隷であろうと注記している (Muhammad Taqī Fakhr Dā'i Gilānī, tr., *Shi'r al-Ajam*, vol. 5, Tehran, 1984/85 [2nd impression], p. 72)。『ペルシア詩史』第4巻でシブリーが、イランでは美少年愛が中心となっていると指摘していること (Sh. A., vol. 4, pp. 186-187)、また、神秘主義詩人ジャーミーのマスナヴィー詩「自由な民 [へ] の贈り物 (Tuhfah al-ahrār)」の美少年愛に関する詩句に言及しつつ、「実のところ、この愚かしい美形愛好 (shāhid-parastī) が国を滅ぼしてしまった。高位の神秘主義者がこの種の愛を教え、仮初の恋 ('ishq-e majāzī 人を恋すること) は真実の恋 ('ishq-e haqiqī 神を恋すること) に至る一階梯であると説けば、国全体が悲惨な状態に陥るのは当然であった」(Sh. A., vol. 4, p. 167) と述べ、美少年愛を shāhid-parastī と呼んでいる箇所があることから、shāhid が美少年を意味している可能性は高いが、この語は美少年だけでなく、美女をも意味するので、ここでは「美形」と訳しておく。

29) Sh. A., vol. 5, p. 72.

になる。何人もの首が転がり、血の川が流れることになる」³⁰⁾。アラビアの求愛者はそれでも愛しい人の許に赴く。求愛者も相手の女性も純真であり、一晚一緒にいても善からぬ考えは少しも起こらない。「アラビア人の恋愛感情は極めて情熱的で真摯である。相手の女性の気品と美德は恋愛感情を高めはするが、過ちは生じない。しかし、イランではそうはいかない」³¹⁾。

2) 求愛者

ペルシア語ガザルの求愛者には自尊心がないのに対し、アラビア語ガザルの求愛者には自尊心がある。

イランでは求愛者は、自分はきわめて卑しい者であると考えている。自分を愛しい人の街の犬と呼び、それに満足するどころか、それすら烏滸がましいと考えている。あらゆる辱めを誇りとし、これこそが恋の究極であると思っている。(中略) アラビアでは自尊心と矜持が(求愛者から)片時も離れない。アラビアの求愛者は愛を乞い求める者ではあるが、乞食ではない。命知らずではあるが、奴隷ではない。苦しみは厭わないが、辱めは受けない³²⁾。

3) 描写法

ペルシア語ガザルの詩句は非連続的で詳細な描写が見られないのに対し、アラビア語ガザルの詩句は連続的で描写が詳細である。

(ペルシア語)ガザルの大きな欠点は、恋愛の出来事が連続的に描写されていないことである。各詩句は独立しており、各詩句においてそれぞれ何らかの詩想や出来事が表現される。アラビア語やヨーロッパの言語では恋愛詩は、大抵、連続的であり、愛しい人の詳しい全身描写や逢瀬、孤独の描写が行われ、興味深い出来事や細々した出来事が叙述される。(中略) ペルシア語ガザルには愛しい人との逢瀬や孤独、待機、別離、旅、宴での同席、会話などの出来事の詳細な描写は求めても得られない³³⁾。

4) 現実性

ペルシア語ガザルには現実性が不足しているのに対し、アラビア語ガザルには現実性がある。

30) Sh. A., vol. 5, p. 72.

31) Sh. A., vol. 5, p. 73.

32) Sh. A., vol. 5, pp. 73-74.

33) Sh. A., vol. 5, p. 71.

(ペルシア語ガザルで)表現される感情には現実性が不足しているので、言葉や表現に真の熱情がこもっておらず、ペルシア語の恋愛詩を読んでも心には何も響かない。一人の命知らずの求愛者の感情とは思えないのである。表明された詩想には不自然さと誇張がある。これに対し、アラビアの詩人は現実性のあることしか述べないので、詩には熱情があり、感銘を与える力がある³⁴⁾。

以上のようにシブリーは、愛しい人、求愛者、描写法、現実性の各点に関してアラビア詩には肯定的な評価を、ペルシア詩には否定的な評価を行っているのであるが、「ペルシア語ガザルには真の感情は大抵の場合、ほとんど見られないと述べたが、ガザルの本質的美点が高度に見られることも多い。神秘主義者たちの作品はすべて、熱情と感銘を与える力とに溢れている」³⁵⁾、「ガザルの本質的構成要素になっている詩想や詩題は、これらの(神秘主義的)ガザルで情熱的に表現されている」³⁶⁾と神を愛しい人と見做すイスラーム神秘主義の大きな影響を受けて書かれるようになった神秘主義的ガザルを高く評価している³⁷⁾。

シブリーによれば、ペルシア語の神秘主義的ガザルでは接吻や抱擁など、清純さ、貞潔さ、倫理に反した言葉や詩想は用いられておらず³⁸⁾、「神秘主義において表現された感情は、現実の、真の感情であるので、詩には人を惹きつける力や熱気、感銘を与える力がある。(中略)恋愛には多くの出来事がある。熱狂、思慕、命知らずな行動、不満、待機、孤独、逢瀬——このような出来事や感情は詩の一般的な主題であるが、これらの感情が神秘主義の言葉で表現されると、そこに大きな力や熱気が生じる」³⁹⁾。「恋愛詩が優れているかどうかは、真実の恋(神を恋すること)——それは神秘主義特有のものである——に基づいているかどうかということにかかっている」ので、また、ペルシア語以外の言語には神秘主義詩はほとんど存在しないので、恋愛詩において、ペルシア語以外の言語はペルシア語に敵わない」⁴⁰⁾とシブリーはペルシア語の神秘主義的ガザルを絶賛している。

また、シブリーが神秘主義的ガザル以外のガザルも全否定してはいないことにも注意する必要がある。シブリーの文学観からすれば、現実性——求愛者の自然な恋愛感情の表現——が欠如した、技巧、虚構のガザルは批判の対象となるべきであるが、シブリーは、その種のガザルを、「フィガーニーの系統では次第に奇想性、新奇な題材使用、難解性愛好(diqqat-pasandī)

34) Sh. A., vol. 5, p. 74.

35) Sh. A., vol. 5, p. 76.

36) Sh. A., vol. 5, pp. 76-77.

37) シブリーは、アッターールのおかげでカスィーダ、ルバーイー(rubā'ī, 四行詩)、ガザル——すべての詩型が神秘主義で満たされたと述べている(Sh. A., vol. 5, p. 117)。

38) Sh. A., vol. 5, p. 83.

39) Sh. A., vol. 5, p. 81.

40) Sh. A., vol. 5, p. 81.

が生まれた。ウルフィー（‘Urfī, d. 1591）が始め、ズフーリー（Zuhūrī, d. 1616）、ジャラル・アスィール（Jalāl Asīr, d. 1639/40）、ターリブ・アームリー（Tālib Āmulī, d. 1626?）、カリームなどがこの詩風を発展させた。この詩風は人気を博し、詩の世界を席卷した。この平衡を欠いた詩風は非常に有害な結果をもたらすもので、詩の王国はナースィル・アリーやバーデイルなどの支配下に入り、かくして偉大な伝統が終わってしまった」⁴¹⁾と批判的に捉えつつも全面的には否定せず、以下のように肯定的に捉えようとしている。

ガザルとは本質的に恋愛感情（の表現）であるので、また、この詩風では恋愛感情が全く消え去っているの、この変化はガザルを害してしまったが、詩としての発展はもたらした。ウルフィーは非常に高度な哲学的問題を表現し、カリームとサーイブ（Ṣā’ib, d. 1677/78）は想像性を大いに発展させた。一部の詩人たちは道徳や教訓について見事に表現した⁴²⁾。

以上のように、アラビア詩との比較においてはペルシア詩を否定的に捉えつつも、シブリーはペルシア詩の全面的な否定は避ける姿勢を見せている。

このようなペルシア詩評価の姿勢は、『ペルシア詩史』第5巻の道徳詩を論じた章において明確に見られる。イランの詩人たちの道徳観は進歩ではなく、衰退と混迷を導くものであるという批判が当時あったようであるが⁴³⁾、これに対しシブリーは、「遁世、知足、諦観、謙譲、自己卑下、寛容性、忍従、寛大さなど、形を変えて何度も表現される論点は意欲の低下をもたらすことがある。度を越しているものもあり、文化の原則に反しているものもある。これらの国々の人々が自由や独立について考えもしなかったのは、恐らくこの教えの影響である」⁴⁴⁾とイランの詩人たちが悪影響をもたらしたことを認めつつも、時代の状況を考慮すべきであるとして、以下のように彼らを弁護している。

忍従、謙譲の教えは確かに一般の人々に意気消沈と意気阻喪をもたらすが、しかし——よく考えてみよ——、アジア諸国では独裁的な君主と貴族が、権力、高慢、権勢の権化となっていて、誰も彼らに物申すことができなかった。忍従、謙譲以外に、何を教えることができようか。道徳を説く者たちは、貧しい者たちではなく、富める者たちが上記の徳目を教えるべき相手であることを心得ている⁴⁵⁾。

41) Sh. A., vol. 5, p. 65.

42) Sh. A., vol. 5, p. 65.

43) Sh. A., vol. 5, p. 173.

44) Sh. A., vol. 5, p. 174. 「これらの国々」と複数形になっているのは、ペルシア語文化圏の国々を念頭に置いているからであろう。

45) Sh. A., vol. 5, p. 174.

生活し、名誉、富、権力を得るためには追従^{ついで}、官仕え、陰謀、策略の他に手段がないような国では、知足、隠棲、寡欲の教え以外にどのような教えがあり得ようか⁴⁶⁾。

ここで特に注意すべきは、イランの詩では知足が大いに称賛されているが、人々はそれを、生活の糧を得るのをやめ、お供えのおさがりで生活すべきであるという意味に間違えて理解している。知足という言葉で彼ら（詩人たち）が意味していたのは、君主、貴族、支配者たちの許で働くのを避けるべきであるということであり、商業、工芸、労働によって生活すべきであるということである。当時、宮廷での仕事に比べて手仕事などは名誉あるものとは考えられていなかったし、それらによって富がもたらされたわけでもなかった。そのため、それらのことを甘んじて行うことが知足と考えられていたのである⁴⁷⁾。

3. おわりに

1874年、パンジャブのラホールで始まった新詩運動の指導者ムハンマド・フサイン・アーザード、そしてこの新詩運動に参加して詩人として頭角を現し、1893年、「詩序論 (muqaddimah-e shi'r-o-shā'irī)」を著して新詩の理論的基礎を築いたアルターフ・フサイン・ハーリー (Alṭāf Husain Hālī, d. 1914) らは、詩の現実性を重視する文芸潮流を生み出した。彼らの目には、ウルドゥー詩は奇想性、題材の新奇さ、比喩の面白さ、誇張などの詩的技巧を過度に重視する弊に陥っており、非現実的なものとなっていると映った。彼らはこのような詩的技巧偏重を改めるべきであると訴え、より自然で現実的な詩を求めた⁴⁸⁾。ハーリーはアリーガル運動すなわちアフマド・ハーンを指導者とするインド・ムスリム再生運動の推進者として、詩人に社会的責任の自覚を、詩に倫理性も求めた⁴⁹⁾。アリーガル運動の一翼を担っていたシブリーのアラビア詩・ペルシア詩評価は、以上のような文芸思想との関連において理解し、検討されなければならない。残念ながら本稿では、アラビア詩とペルシア詩の比較においてはアラビア詩を高く評価し、ペルシア詩を否定的に評価するが、善悪二元論的な立場からペルシア詩を批判するようなことをシブリーは行っていないこと⁵⁰⁾、カリーム以降のペルシア詩の文学的価値は否定したもの、ペ

46) Sh. A., vol. 5, p. 175.

47) Sh. A., vol. 5, pp. 184-185.

48) アーザードの文学観に関しては、拙稿、「『生命の水』序論に見られるアーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論」(『大阪外国語大学論集』第33号, 2005年)を、ハーリーの文学観に関しては、拙稿、「ウルドゥー近代詩の形成——ハーリー「詩序論」について——」(『大阪外国語大学学報』第70-2号, 1985年)や下記論文を参照。

Alessandro Bausani, "Alṭāf Husain Hālī's Ideas on Ghazal", *Charisteria Orientalia*, 1956.

Laurel Steel, "Hālī and His Muqaddamah: The Creation of a Literary Attitude in Nineteenth Century India", *Annual of Urdu Studies*, no. 1, 1981.

49) ハーリー「詩序論」に関する上記拙稿を参照。

50) シブリーの次の世代の代表的思想家ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal, d. 1938) は、存在一性論 (wahdat al-wujūd) を批判する立場から、ペルシア詩を以下のように非難している。シブリーやシブリーの時代の文芸思想とどのように関連するのか、興味あるところである。今後の検討課題としたい。

ルシア詩を全否定するようなことはせず、ベルシア詩の長所、短所双方に言及し、ベルシア詩の全体像を描き出そうと努めていること、ベルシア詩の短所とされる点を擁護しようとする態度を見せていることを確認するにとどまった。他日を期したいと思う。

アジャムの詩人たちの多くはその生来の性向により存在一性論哲学 (wujūdī falsafah) に傾斜していました。イスラーム以前からイラン人にはこのような精神的傾向があり、イスラームはその発展をしばらくは抑えましたが、機を捉えて、イランの先祖伝来の、生来の傾向が顕在化しました。言い換えると、ムスリムの間に存在一性論 (wahdat al-wujūd) に基づく文芸の基礎が築かれたのです。詩人たちはきわめて見事な、表面的には魅力的な方法でイスラームの信仰を否定し、イスラームが称賛するものを批判すべきものであるかのように述べ立てたのです。イスラームが貧困は悪であると言えば、サナーイー (Sanā'ī, d. 1134) は、貧困は最高の幸福であると言うのです。(Shaikh 'Aṭā'ullāh, ed., *Iqbāl-nāmah*, vol. I, Lahore, n. d., pp. 35-36)。